小中学校における言語・聴覚障害児支援の現状について

－　令和５年度愛知県言語・聴覚障害児教育研究会　会員の意見より　－

愛知県特別支援教育研究協議会　佐久間

＜保健・医療関係へのお願い等について＞

○　今年度、粘膜下口蓋裂の子どもが入室してきました。口蓋垂が分かれていて、とても分かりやすい状態でしたが、入室以前は分からなかったとのことです。検診等で、喉の奥を見る機会があるかと思いますので、口蓋裂や舌小帯短縮症など発音に影響があるものも早期に発見できますでしょうか。また、特別支援学級に在籍することで学校生活が安定して送れるのではと思われるお子さんが通常の学級にいることがあります。医療機関で特別支援学級の在籍がよいと判断できたら、そのことを保護者に伝えていただけるでしょうか。

○　学校での様子を保護者に伝えても、正確に医療機関に伝わらないことが多くあります。また、正確に伝えられない保護者もいますので、学校と医療機関が直接、情報交換できるとありがたいと思います。

○　補聴器や人工内耳の装置の扱い方、装着している子どもとの関わり方について、専門の先生から通常の学校の教員への指導助言が必要と感じています。

○　病院の言語聴覚士による言語指導を受けている児童が、「ことばの教室」でも学習するケースが増えてきました。保護者や言語聴覚士の承諾を得て言語指導を見学に行き、指導技術などを研修することができました。医療との連携は必須と考えます。

＜各教育委員会へのお願い等について＞

○　ディクテーション機能が発達している現在ですので、普通教室で簡単に視覚情報を得られる環境の整備が希望です。難聴の生徒は、外国語の学習では、耳からの情報に自信がなく、聞こえなくてもやり過ごしているように見えます。私たち素人には、器質的な問題の有無は分かりません。そのため、構音指導の研修が進んでいくとよいと思います。

○　軽度難聴の場合、保護者が病院に児童を連れていってくれるが、構音異常の場合、重くても医療機関にかかったことがない場合が多いです。地区ごとに、教育委員会が医療と連携を取り、学校が指導に困ったら、「まずこの病院で相談や診断を受ける」といった道筋を作っていただけるとありがたく思います。今は中堅病院から個人病院までで診断してくれるところがほぼない状況で、診断できる病院も定員がいっぱいです。大病院は予約待ちが長く、診察も午前中なので、保護者が嫌厭する傾向にあります。

○　補聴器や人工内耳の技術が進んだこと影響しているのかもしれませんが、装置を装着する児童が地域の小学校に入学してくるケースが増えてきたように思います。そのため、聾学校の先生の巡回指導を依頼するケースも増えてきました。しかし、聾学校の巡回指導をする担当者の旅費が聾学校の出張旅費のようで、３学期になると旅費がなくなり巡回できなくなる場合があると聞きました。巡回指導のための旅費の増額が必要と思います。

○　難聴児は、見た目で分かる障害ではありません。そのため、「支援を忘れやすい」、「支援をしなくてもよい」と通常の学級の担任が勘違いしてしまうケースがありました。抽象的な内容を理解し始めるときに聴覚障害児がぶつかる壁（９歳の壁）をどのように支援するかは、通常の学校の教員は知りません。聴覚障害児の教育を学ぶこと（聾学校・保護者・各学級担任との連携）が必要と思います。

※　私が指導したケースは、保護者が聾学校の先生と連携していたため、情報を共有し、私も連携することができました。このケースの子どもは、聾学校の幼稚部に通学し、通常の小学校に入学しました。そして、「ことばの教室」に通級し、定期的に聾学校の通級指導も受けていました。保護者は、「９歳の壁」のことを理解して、早期の学習を進めたり、文章理解のための予習を家庭で行ったりしていました。また、私は、本児の聾学校の通級指導を参観して、「ことばの教室」での学習の参考にしていました。特に「分からなかったときに援助を求めるスキル」を学ぶことを大切にしていました。聞き逃すことが当たり前にならないように気をつけていました。

○　外国語が小学校でも始まっているため、難聴児には困難さがあると聞いたことがあります。口元の動きを見て、正確に聞き取り発音することが難しいと思われます。聾教育での英語教育の専門的な知識のある先生の指導が必要と思います。特にリスニングに課題があると思います。

○　受験の配慮は必要と思います。それに関する知識が中学校や高等学校の教員は不足していると思います。

○　難聴という障害があるから、高等学校や大学への進学、また就職ができないと考えている児童生徒がいるのではないか、進学や就職を含めて将来を見通すことができているのかも気になります。難聴の成人の方が、仕事に就いている話を聞く機会があることもよいと思います。そのためには、福祉との連携が必要になってくると思います。

○　難聴生徒の高校受験について、一部の私立高校において、受験時の合理的配慮が不十分に感じています。進路担当者間の事前相談の段階で、難聴生徒の受験時の配慮の申し出を快く受け入れてもらえないケースがあります。具体的には、英語のリスニングの受験において、「①座席を前から２列目以内にしてほしい」、「②別室で受験したい」、「③ロジャーを試験官の教卓に置いてほしい」といった保護者の希望が聞き入れてもらえませんでした。このケースでは、最終的に校長間の相談で合理的配慮を得ましたが、こうした状況を危惧しています。公立高等学校は、しっかり配慮していただけるし、多くの私立高等学校も相談に応じてくれますが、一部の私立高等学校では、なかなか困難な状況と感じています。

○　人事異動は、通常の学校の教員と同じ扱いで、突然、「ことばの教室」の担当者になるケースがほとんどです。名古屋市では、特別支援学校・特別支援学級・通級指導教室での異動があると聞きました。専門職としての人事を考えることで、担当者の専門性が高められると考えます。

＜研修・相談事業に関するお願い等について＞

○　通級指導の研修は、愛知県総合教育センターや三河教育研究会がやっているため、県言聴研の部会では聞こえや構音に特化していただきたいと思います。できれば、県総合教育センターで「ことばの教室」や「言語学級」などの初任者研修を行っていただきたいと思います。

○　同じ県内でも、市によって人数や体制が異なるので仕方がないと思いますが、専門的な知識が必要な分野なのに研修の機会がほとんどなく、一人で困っている先生方も多いと思います。研修の場を増やしてほしいです。また、ST や医師などの専門家が巡回して、在籍児童や指導を見て助言してくださる機会があるとよいと思います。名古屋市の幼稚園の「ことばの育ちルーム」のように、小中学校にも専門家の巡回がほしいと思います。

○　名古屋市は、きこえや言語に特化した研修が皆無の状況です。特殊な分野ではありますがきちんとした研修を受けられるようにしてほしいと思います。例えば、長年自己研鑽を積んだ教員が異動してしまったり、講師の先生方の入れ替わりが多かったりする状況も改善が必要だと思います。

○　名古屋市では幼稚園のみ専門家（ST）の巡回があります。小学校の通級にも実際に子どもを診てもらえる専門家の巡回や担当者が相談できる機会を設けてほしいと思います。

○　名古屋市では数年前まで言語聴覚士による研修があり、助言をいただく機会がありましたが、言難に関わる研修の場がなくなってしまいました。より適切な指導支援ができるよう、他県や名古屋市の「幼児の育ち応援ルーム」のように、言語聴覚士による巡回や相談の機会を設けていただくことを切に願います。

○　言語聴覚士の方に各学校を回っていただき、児童の課題を見ていただいて助言や指導方法を伺いたいとお思います。また、初めて難聴児の指導支援に関わる人のためのハンドブックが常備されるとありがたいと思います。

○　難聴児の教育に関して、通常の学校の担任は研修を受けていません。補聴器や人工内耳を装着している保護者からの情報しかないと思われます。そのため、巡回指導等で聾教育に関する専門の知識を持った教員の指導をいただきたいと思います。

○　小中学校の「ことばの教室」の担当者研修は、担当者になってから受けます。そのため、１年目は、どのように指導してよいか分からないことばかりでした。事前に研修する制度があると、１年目から指導しやすいと考えます。

○　支援センターのような施設がある市は、児童精神科医や言語聴覚士が在籍していて、相談する場があると聞きました。しかし、私の市では、専門的な立場で相談できる方がいらっしゃいません。そのため、入級や退級に関する相談、指導内容等に関する相談ができません。センター的機能のある機関が身近にあると助かります。